

高校シンポジウムin丸亀 (1/24~25)

いつもなら、全体会・分科会で交流した内容を記載・報告するが、今回は少し角度を変えて伝えたい。全体会、分科会後には夕食交流会がある。北海道・東北ブロックから南へ下り、最後はホストの開催地の順番であいさつする。北海道を皮切りに一人づつあいさつという流れで関東甲越は二番手だった。香川(丸亀)は何回目というあいさつが多く、自分もとっさにあいさつを組み立てる。「夏の盛りにロードレーサーを輪行しうどん屋をはしごしたが、あの頃はまだ若かった。今回は若手を連れてきました。」と武さんにながし、無難にこなしつつもりだった。後から少し思うところがあった。

シンポジウム終了後、バスの出発まで間があり駅まで歩くことにした。途中「太助燈籠200m」の案内板が目にとまりピンとくるものがあった。辿り着いた先は前日も通った小さな親水公園だった。丸亀うちわ創始者の瀬山登像が正面に建つ、すぐ左奥に高さ5.3mの青銅製の燈籠があった。石造りの土台には「江戸」「中講」の文字が刻まれている。「金毘羅講燈籠」が正式名称で、寄付額が一番多かった塩原太助の名に因んでいるようだ。実は、交流会スタートの乾杯あいさつでは香川ゆかりの偉人達に触れ、1947教育基本法制定時の東京大学総長、南原繁の言葉が引用される格調高いものだった。塩原太助が群馬県にゆかりのある人物と知る県外者はほとんどいないだろう。この話なら交流会の印象は変わっていたなど勿体ない気持ちがあった。それはお国自慢をしたかったからではなく、そこにつながりを感じるから。



(萩原)

今回シンポジウムに現地参加してくれた若手の武さんは、別の集会では何度かオンライン参加の実績がある。最初は細かったつながりを少しでも太くしようとはたらきかけてきた成果がそこにある。担任手当の導入に限らず「分断」を惧れる声をよく耳にする。そこをスタート地点に据える方が賢い気がする。ユニオンのユニ(uni)が意味する単体にはなれないし、実はそうなる必要はないのかもしれない。それでもつながりを広げ、強化することはできる。そんなことを感じたシンポジウムだった。

TANE! (青年教職員学習交流集会) in長野 (1/30~2/1)

「つながること、実践的に学ぶことの大切さ」

TANE!in長野に参加してきました。リポートでの参加経験はありますが、リアルでの参加は初になります。同僚を誘ったものの一人で参加することになりましたが、「何とかなるだろう」とふらっと参加した感があります。会場の第一印象は「若い!」。私自身、まだまだ若いつもりですが、年齢は30代半ば。職場では中堅です。それに対し、見るからに20代の先生が多く、さらに義務校や特別支援の方も多し、堅苦しくないフラットな挨拶や、自己紹介では一発芸を披露する方がいたり、2日目には朝の会と称してラジオ体操をしたりするなど、終始若さにあふれていました。

そして学習。平和学習がテーマの分科会では、学年や学校・分科会をまたぎ、保護者をも巻き込んだ大規模な教育実践を紹介され、思わぬ形で、個人でできる教育活動の限界と組合を含めた「つながることの大切さ」を痛感しました。また、講座や全体会では大学教授の講義や夜間定時制や自主夜間中学の事例を通して、インクルーシブ教育について学びました。本などを通して自分なりに学んでいるつもりではありますが、やはり実践紹介や専門家の話はまだ違う刺激となります。

帰りに寄った善光寺や上田市の古本屋も併せて、非常に濃い2日間の学びをすることができました。次回はどなたか一緒に参加しませんか?

(武)

